

8) *Arctotheca calendula* (L.) Levyns detected from Mie Prefecture. This South African species is also introduced to Australia and Portugal.

9) *Daucus glochidiatus* (Labill.) Fischer et Meyer of Australia, was found in Mie Prefecture. The last two weeds are assumed to have entered Japan together with wool materials imported to Japan.

10) A cosmopolitan, *Sonchus asper* (L.) Hill is supposed to have reached Japan some 100 years ago. In Japan two forms are seen, viz., f. *asper*, a completely glabrous form, and f. *glandulosus* of which the peduncles and upper stems bear glandular hairs.

---

□Phạm-Hàng Hộ: *An Illustrated Flora of South Vietnam* vol. I, pp. 1115, figs. 1-2787, 1970. vol. II, pp. 1137, figs. 2788-5272, additional figs. 52, 1972. 南ベトナムの植物 5324 種の図説である。菌類 48, 地衣類 12, コケ類 22, シダ類 122, 裸子植物 35, 被子植物 5135 の図と記載、属や種の検索がのせられている。これらはすべてベトナム語で書かれている。同氏が *Flora of Vietnam* として 1960 年に出版されたものを充実させ完成したのが本書である。図も記載も簡単で細かな所がわからぬが、今まで図の全くなかった種類がかなり図示されている。フランスが残した標本を基礎にして作られているので、Lecomte の *Fl. Indo-Chine* と共に使うと便利である。貴重な本を見て下さった韓国梨花女子大の李永魯氏に感謝します。

(山崎 敬)

○バイカル湖産のジュズマリモ (小林義雄) Yosio KOBAYASI: *Sphaeranostoc pruniforme* (Ag.) Elenk., collected in Baikal Lake

1975 年 7 月 23 日、イルクーツクから日帰りでバイカル湖見物に出かける。同行は前川君、インツーリストの若い婦人が案内役である。アンガラ河の右岸に沿って東南に走る 72 キロの道路はよく舗装され、欧洲シラカバ、欧洲アカマツ、シベリヤカラマツなどに蔽われた低い山なみが続き、それらの間には湿地も見られ、農牧を業とする 2~3 の部落も望まれた。1 時間余のドライブの後、河口（河の入口）のリストビアンカ（カラマツ林の意）村に着き、太洋の如く拡る湖に接することが出来た。幸に波静かで、対岸の山々は模倣として霧に包まれている。湖岸に山がせまり、斜面にはカラマツなどの疎林があり案外に明るい風景であった。インツーリストのスケジュールの下では自由行動はゆるされず、湖岸のレストラン“バイカル”で食慾の有無に拘らず昼食をさせられ、次いで博物館を見物し、湖岸を少々散策して帰途につくという寸法らしい。前川君は不平たらたらであったが、インツーリストのベルトコンディヤーに載せられたからには、その範囲内で有效地に時を過すべきと考え、レストランで注文せぬのに出されたオムリー（鮭鱈類でオムールと発音するのが正しいらしい）の薄塩にした切身

をさかにブドー酒の大瓶をほとんど一人であけてしまった頃、漸く御気嫌になり、食事は略して博物館へ向う。バイカル湖には固有の生物が多く、バイカルアザラシをはじめとして興味ある動物がよく陳列されてある。しかし植物の姿がほとんどない。係りの者におし葉が見度いと云うが判らぬ素振りである。植物の標本があれば何でもよいから見て呉れとの願みに、やっと通じたのか、出して呉れたのがマリモの液浸標本であった。旅行中ずっと持っていた管瓶を出して快くその2-3を分けて貰うことが出来た。帰国早々科学博物館の渡辺博士よりソ聯とポーランドで出版された藍藻分類学の文献を示され、委細が判明した。

ゴレルバフ、コシンスカヤ、ポルヤンスキ共著、ソ聯藍藻誌(1953)によれば、球状の遊離したコロニーをつくる藍藻属(*Sphaeronoctoc*)にはソ聯産として8種が記載されてある。このうち径1~2 mmの小型のものには *Sph. microscopicum*, *Sph. minutissimum* があり 1-2.5-5 cmの大型のものは *Sph. kihlmani*, *Sph. coeruleum*, *Sph. sphaeroides*, *Sph. pruniforme*, *Sph. Zetterstedtii*, *Sph. Riabuschinskii* の6種が挙げられ、標本のものは *Sph. pruniforme* に相当し、最大の種類である。筆者の所見と文献の記載とを合せると次の如くなる。

コロニーは径2-6 cmの球状、寒天質、内部は半透明で弾力がある、藍青色で液浸では略無色となる。球体の中心から、鎖状に連結したジュズ藻の藻体が放射状に走り、

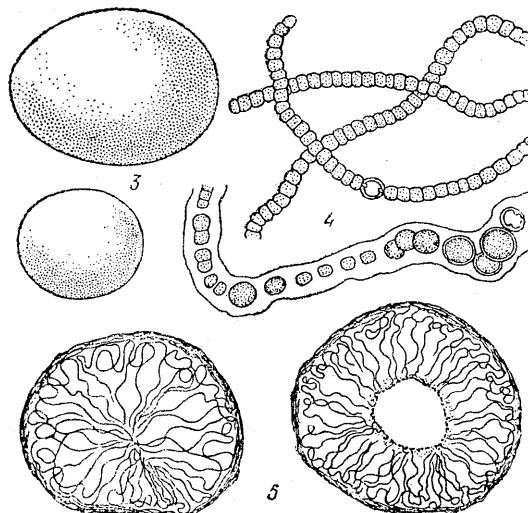


Fig. 1. *Sphaeronoctoc pruniforme* (Ag.) Elenk.  
(M. M. Голлербах (1953)による)

周辺部は藻体の密度が高い。コロニーの中心部が空洞をなすものもあり、日本のウツロマリモに似た状態を現す。各細胞はダ円形又はタイコ状、径4-5μ、長さは径と同長又は少しく長い。異形細胞は径6-7μである。

将来日本でも発見の可能性があるかも知れない。大量に入手出来たら三杯酢か清汁にしたらオツなものであろう。後になって気がついたが、湖畔には臨湖生物実験所もあり、色々な標本も陳列されてある由であった。翌日イルクーツクからハバロフスクへ飛行機で飛んだが、バイカル湖を横断するのに僅か2分45秒であった。

#### □山田幸男博士(1900-1975)

日本の藻類学界の重鎮として永い間活躍された山田幸男先生は病気加療中の処、去る7月6日京都の自宅において逝去された。享年74才であった。

山田幸男先生は明治33年(1900)に京都で出生され、幼時に東京に移住され、東京府立第一中学校、第一高等学校を経て、大正13年に東京帝国大学理学部植物学科を卒業、同学において副手を勤められた後に、北海道大学に新設された理学部教官として招聘され、昭和5年に任官、6年から定年退官の昭和39年まで同学の理学部植物分類学講座の担任教授として、33年の長きに亘り研究と教育に従事された。退官後は数年間札幌で研究を続けられたが、その後郷里の京都に帰られ、ここで多年の研究の集大成に専念されていた。

先生は藻学、とくに海藻の分類学の分野に多くの業績を残され、また多くの藻類研究者を養成されるとともに、日本藻類学会、国際藻類学会の創立に尽力され、さらにそれぞれの会の会長を歴任されるなど、昭和10年に岡村金太郎博士が亡くなられたあととの日本の藻学の指導者として、その発展に献身され、学界に大きな足跡を残された。「至誠」の語を座右の銘とされた山田先生は極めて誠実な人格者であり、内外の多くの方達から深く敬愛された。いま掛替のない先生を失ったことは誠に哀惜の念に堪えない。山田先生が学界に残された功績は大きく、いま詳しくこれを述べることは紙面が許さない。ここでは藻類、とくに海藻の分類学的研究の分野の足跡を辿り、先生を偲びたい。

先生の最初の研究は台湾の海藻についてであり、これは東京帝国大学の早田文蔵教授のもとで、岡村金太郎博士の指導を受けて行ったもので、卒業論文となった。その後先生が研究の対象とされた地域は台湾から千島に至る旧日本国の大半に及ぶが、どちらかと言うと南方の地域が多い。このことは先生の最初の研究と関係があるようにも思われる。南方地域の海藻フロラの研究として、前出の台湾(1925)の他に、台湾琉球嶼(1950)、沖縄本島(1934)、与那国(1938)、ミクロネシアのアント環礁(1944)、八丈島(1952, 1953, 1957)のそれなどがある。八丈島の海藻についてはまだ断片的な報告の印刷のみとなっているが、本年4月に病床にお見舞した時の先生の話による